

会長挨拶

飼育担当集まれ～ ー継続飼育とその役割ー

宮下英雄



第11回全国学校飼育動物研究会が、「飼育担当集まれ、継続飼育とその役割」を研究主題に掲げ、ここ「かながわ県民センター」にて開催できますことに、関係各位のご協力、ご支援、ご尽力に感謝を申し上げる次第です。特に、日本獣医師会、神奈川県獣医師会、日本小動物獣医師会の皆さまをはじめ、文部科学省、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、川崎市教育委員会の関係各位、並びに、全国規模の組織で研究運営にご尽力されておられます小学校校長会、幼稚園園長会、理科教育、生活科・総合的な学習、道徳教育、特別活動、PTA全国協議会など、18の各教育研究会、組織団体のご後援をいただき、開催できましたことに、改めて感謝を申し上げます。また、本日は、お忙しい中、ご臨席を賜り、そして、ご挨拶もいただきますことに、感謝の至りでございます。重ねて、御礼を申し上げます。ありがとうございます。

また、全国各地からご参集くださいました多くの皆様方にも感謝を申し上げます。お陰様で、300名前後の参会が推測されるようです。より多くの皆様方からの貴重なご意見もいただきながら、さらに、実りの多い研究会にしていきたいと考えます。宜しくご協力の程御願いを申し上げます。

さて、この研究会は、発足いたしまして、今回が第11回という祈念すべき日を迎えました。発足以来から、日本の将来を担う子供たちの心身が、「より豊かに、より健やかに、より逞しく」

成長することを願い、動物が持っている秘めた力、すなわち、子どもに与える感化力や影響力を、教育活動に積極的に取り入れようとし、動物飼育の実感体験を通して、情愛豊かな子どもの育ちの変容の成果とその課題を、実践事例を通して、発表を続けてまいりました。

今回は、11回という一つの節目を迎えました。この節目にたち、教育界や社会全体を眺めてみます。まず、はじめに教育界を眺めてみますと、この四月から10年間ごとに改訂されてきました学習指導要領も新しくなり、新しい学習内容、新しい学習事項に基づいた教育実践が行われます。特に、動物飼育に関係いたしましては、「生活科におきまして、動物を飼ったり植物を育てたり、生命を持っていることや、成長していることに気づき、生命への親しみを大切にすることができるようするために、長期にわたる飼育・栽培において、どちらか一方を行うのではなく、2年間の見通しを持って、両方を確実に行う方向に変わりました。」生き物への親しみと生命の尊さを実感させることに大きな意義を見出すことができるようになりました。今回の大会主題もこのことに因んで「継続して飼育活動に関わることの教育効果と課題」としたことにあります。このことに関係いたしましては、後ほどご講演いただきます、文部科学省初等中等教育局視学官であらせませす日置光久先生のご講演にてご指導をいただきたく存じます。日置先生よろしくお願ひいたします。

つぎに、社会全体を眺めてみますと、昨年の日本を象徴する漢字は「変」という文字でした。変は、変化を求めている世相の現れと感じられます。このことは、日本のみならず、世界全体に変化を求める風が吹き始めています。象徴されましたのが、アメリカ合衆国大統領選挙におかれましては、オバマ氏の演説です。演説のはじめには、必ず、チェンジ、CHANGEの文字が強調されておりました。

この変化の動きを、本研究会の第11回という節目に合わせて、今後の新たな10回を考えると、これまで積み重ねてきた、この研究会の成果と課題を謙虚に振り返る大切な時期であり、

節目と考えます。

この成果と課題につきまして、いくつかお話をさせていただきます。ご参会のみなさまも一緒にお考えいただければ幸いに存じます。はじめに6つの成果について述べさせていただきます。

その1番目は、動物飼育を通して、子どもが優しくなる、向社会的行動への高まりがみられるということです。それは、動物の世話を続けることによって、動物の動き、表情、鳴き声、食べ物の食べた量、糞の状態などから、動物の健康状態、動物の気持ちを読み取ることを通して、友達やお年寄りなどに対して、相手を思いやる心が育ってきたという実感です。

その2番目は、獣医師との連携によって、正しく動物の世話の仕方や動物の生態の特徴を学ぶことができるようになってきたということです。また、動物を取り巻く諸課題について、その解決や方法についての正しい認識を持つことができ、安心して、自信を持って動物飼育を行うことができるようになってきたということです。

その3番目は、文部科学省、各都道府県教育委員会、各市町村教育委員会のご理解とご協力、ご支援をいただき、動物飼育が行いやすいようにするための、様々な施策を講じてくださるケースが多く見られるようになってきたということです。教育委員会が獣医師との連携に関わる諸費用などを予算化されている自治体が増加傾向にあります。このことは、学校や園にとりましては、命ある大切な動物を子どもとともに守り抜くことに非常に助かっています。

その4番目は、教職員の研修メニューに動物飼育を取り入れ、教師自らが実践と理解を通して、子どもとともに飼育の世話ができるように計画的に取り組んでいる研修会や研究会が多くなってきたということです。動物飼育に関して専門家不在である学校・幼稚園・保育園にとっては、大いに助かっています。

その5番目、この研究会への参加者が、毎回増えてきているということです。この状況は主催者側といたしましては、本研究会の目的達成のためには、大いに嬉しい限りです。事例研究発表をしてくださる研究実践者の方々、そして、ご講演、基調講演をしてくださいます、諸先生

方のおかげです。この場をお借りして感謝を申し上げます。

その6番目です。参加者の中に、将来教員を目指している学生の参加が目立ってきているということです。本日も、聖徳大学、群馬大学、東京学芸大学、鎌倉女子大学、帝京科学大学、東京家政大学、昭和女子大学、東京農業大学、麻布大学、北海道大学などから多くの学生の参加がみられます。また、研究発表もしていただきます。昨年の北海道大学の4名の事例発表には、この会場が、熱気を帯びた記憶がよみがえってきます。教師の後ろ姿をみて子どもは育つといわれます。教師が、動物飼育に関心を持つことによって、子どもの関心を誘発することができます。是非、この研究会での学びを、フレッシュなエネルギーとして教育現場で発揮していただきますようお願いいたします。

以上が、研究会での事例を通しての成果を6点あげさせていただきましたが、課題につきましては、総括的に次の4点を述べさせていただきますと

1. 教員研修会への参加が極めて少ない現状にある。
2. 学校の責任者である校長の経営方針によって、取り組みへの温度差が大きい
3. 鳥インフルエンザの感染を防ぐということから、飼育舎を閉鎖したままにある学校がみられる。
4. 教育行政と獣医師会との連携がさらにスムーズに行われるよう連携の輪を拡大していきたい。

以上、6つの成果と4つの課題を述べさせていただきました。この成果をさらに実践を通して継承しつつ、その中において、課題の解決が行われますことを説にお願いを申し上げますとともに、これから行われます発表やパネル展示をご覧いただき、また、ご参会の皆様方からご意見や解決策へのご示唆をいただきますよう、よろしくをお願いを申し上げます。挨拶といたします。

(聖徳大学児童学部教授)